原始古代の沖縄（1）

新　田　重　清

はじめに

当館の主催した第1回博物館文化講座で「沖縄の貝塚」と題して沖縄の先史文化全般について，その概要を紹介しましたが，その後の沖縄考古学界の研究には著しい進展がみられます。

すなわち，読谷村渡具知東原遺跡の調査によって従来，沖縄では一番古いと考えられていた伊波，荻堂式土器よりも，さらに古い九州縄文前期の曽畑，轟系土器が発見されました。その後の継続調査によって曽畑，轟系土器が出土した下方の層より，さらに古い爪形文土器が発見され，沖縄の新石器文化は少なくとも今から約６０００年前に登場していたことがわかりました。また，具志川市教育委員会の実施した地荒原貝塚および苦増原遺跡の緊急調査によって焼土（炉跡？）や柱穴を伴なう住居跡が検出され，苦増原遺跡からはシイノ実などが入った貯蔵穴らしい遺構も発見されて，当時の原始共同体の生活が，おぼろげながらわかってきました。

その他，最近の研究動向で紹介されているように，先土器時代の研究やグスクの研究ならびに土器型式の設定，編年等にすぐれた研究報告がなされています。

これらの最近の成果を紹介しながら，沖縄の原始古代社会を概観しょうとしたのが本稿です。

したがって，一般，高校生を対象とした「考古学へのいざない」ともいうべき入門書ですので，進んで研究される方のために，わたくしが参考または引用した論文を頁末に掲載しておきます。

本題は次のような項目になっています。

1. 先土器時代
　　ー骨角器文化ー
2. 新石器時代（貝塚時代）
　　ー狩猟，漁撈・採集を基盤にした社会ー
3. グスク時代
　　ー原始　～　古代への過渡期ー

1　先土器時代ー骨角器文化ー

沖縄の先土器時代の遺跡としては，伊江島カタ原洞穴，ゴヘズ洞穴，山下町第一洞穴などが知られています。これらの洞穴からは，文化遺物として骨角器製品が検出されています。

この骨角器文化は，いろいろの状況から時代的には旧石器時代に対応するものと考えられています。ところで人類の登場した地質時代の第四紀は洪積世と沖積世に分けられます。洪積世には四回の氷期と三回の温暖な間氷期が交互におとずれます。もっとも寒冷だった氷期には北半球の高緯度地帯は平均１６００m，最大４０００mもの厚い氷が覆い，日本（沖縄）を含む中緯度地帯では夏季の平均気温が今日より8～１０度低かった。なお，海面も温暖期には海進し，寒冷期には海退したが，

（にったじゅうせい・　学芸員）

海退期の著しい時期には現在よりも１００m以上も低かったと考えられています。最後の氷河期の海面低下は１２０m位と推定されます。

さて，洪積世のある時期に沖縄が中国大陸南部や台湾と地続きであったことはナウマン象やシカの化石が産出することによって知ることができます。しかし，具体的にはいつ頃どのような形でつながっていたか，まだ充分にわかっていません。

地質学の最近の研究によると，洪積世後期（約１５万年～１万年ごろ）以降は大陸とはつながることなく分離しているとの意見が一般に支持されているようです。そして洪積世の末期頃（約１万年前），現在の琉球列島が成立したと考えられています。

ところで象化石の出土地として，現在三カ所知られています。

宮古島の中央部，東海岸に沿う大野越の西側に棚原洞穴があります。この洞穴からはナウマン象の右上顎第二臼歯と下顎臼歯が発見されています。もっともこの象化石についてはナウマン象ではなく別のグループに属する象であろうとの異論もあります。宮古では，あと一カ所，平良市島尻海岸近くの道路，島尻層最下部層と考えられるところから，マストドン象に属する臼歯が発見されています。また，糸満市喜屋武海岸の那覇石灰岩層からはナウマン象の上顎第二臼歯が発見されています。

従来，沖縄各地にある石灰岩の裂目や洞穴堆積層から出土した獣類化石としては，リユウキユウジカ，ノロシカ，リユウキユウキヨン，カモシカ，イノシシなどが知られています。

これらの動物を追って人間の集団が恐らくは中国大陸から沖縄にもやって来たであろうことは容易に推定されます。

沖縄の洪積世人類の可能性のある人骨が，現在四カ所で発見されています。これらは大山洞人，カタ原洞人，桃原人などと命名されています。また，具志頭村港川の採石場からは，洪積世人類として報告（今から１８２５０±６５０年前）されている人骨が５～６体出土しています。

これらの人骨と文化遺物との共存関係は明瞭ではないが，山下町第一洞穴からは同一層（第６層）から人骨と骨製品が出土しています。伊江島カタ原洞穴でも人骨とともに自然石を粗く打ち欠いた礫器状の石器や人工遺物と考えられる骨角器製品などが採集されています。出土状況が共存関係にあるのかどうかについては，精密な検討が要求されますが，共存関係にあった蓋然性が強いようにおもわれます。

では，これら洪積世人類はどのような生活をしていたのでしょうか。

調査が行われた伊江島カタ原洞穴遺跡，同島ゴヘズ洞穴遺跡，那覇市山下町第一洞穴遺跡，具志頭村港川遺跡の報告書をもとに考えてみましょう。

沖縄の洪積世人類は，小さなムレ（１家族ないしは２，３家族で１０名内外と推定）を構成して岩蔭または半洞穴を住居とし，骨角製品を主な道具とし，僅に粗雑な石器も使用していました。

主に狩猟を営んでいたようですが，伊江島のカタ原洞穴からはチョウセンサザエなどの巻貝が検出されますので海産物採取も行われていたとおもわれます。

すでに火を使用することも知っていました。しかし，土器を作ることは未だ知りませんでした。

^{14}C年代のうえからは旧石器時代に相当することが明らかにされています。

伊江島の北海岸カタ原に，海側に向って開口した海蝕洞がいくつかあります。この海蝕洞のうち，

人骨や骨角製品が出土した遺跡は第２号洞穴と名づけられたところです。

洞穴は，間口は幅１０m，高さ２m，奥行３m内外で浅く，洞内堆積層は上から赤土の層，陸成トラバーチン（厚さ１０cm），化石層（厚さ１０cm），海成トラバーチン（厚さ１０cm）の順になっています。

この洞穴から戦前，鹿の遺存骨角に加工された人工品が検出されています。シカの掌骨を３，４cmの長さに切断してその両先端を二又状もしくは三又状に加工したもの，角の先を両方からけずって刃先を出したもの，及び角座の部分を切り取って円形平板状にしたものです。人工品には鈍器のようなもので明らかに加工されたものがみられます。ただ一例，掌骨上端部の一部に，比較的精功な孔が穿れているものがみられます。戦後，多和田真淳氏によって人間の頭骨片と礫器の一種かとおもわれる石器２片が発見されています。礫器状の石片については，使用された石器とみなすかどうか今後検討する余地があります。人間の頭骨片については，成年男性の左頭頂骨片で，骨の弗素含有量と強度の化石化を考慮して洪積世に由来した化石のHomo sapiens の疑がもたれると報告しています。

骨角器製品の出土した重要遺跡に，もう一つ山下町第一洞穴遺跡があります。

山下町第一洞穴は，那覇軍港からペリー側へ漫湖に沿うて走る県道第７号線の南側丘陵，標高約20mのところにあります。母岩は那覇石灰岩でこれが水蝕をうけて洞穴を形成したものと考えられています。遺跡付近は，戦後の早い時期に採石が行われ，密集した人家の片隅に遺跡がぽつんとのこされています。これは洞穴が後世，古墓として利用され，拝所になっていたため破壊から免れたわけです。

この遺跡は，戦後の１９６２年頃発見されたもので，伊江島カタ原洞穴遺跡に次ぐ旧石器時代の遺跡として大変注目を集めました。

この遺跡は，２回にわたって調査が行われています。

調査の結果は洞内堆積層が第６層まで確認されています。第１層骨壷層，第２層陸棲マイマイ層，第３層木灰層，第４層黄色土無遺物層，第５層木灰層，第６層暗褐色土鹿骨層。

人工品の出土において注目すべきことは第５層から石器と見做される遺物（石弾状のもの２個，礫器の一種かとみられるもの１個）が出土したことと，第６層から骨製品が出土したことです。骨製品は又状骨製品，角製品（角座から１３cm内外のところを両面から加工し切先状に刃を出したもの），及び座骨を山形状にしたものなどが検出されています。伊江島カタ原洞穴で発見された円形平板状製品などは検出されておりません。したがって遺物の組成において，多少の相違がみられます。

このような出土上の異同を，高宮広衛氏は編年上の序列を示すものかと考えておられるようです。

ところで第２次調査では，第６層から人骨が検出されています。いわゆる第６層においては，骨角製品と人骨は共存関係で検出されたということになります。これは大変重大な発見です。

人骨が出土した第６層は，周囲の状況から第３層，第５層の木灰層と同時代の遺物であると観察されており，第３層，第５層の木灰層の放射性炭素年代「32,100±1,000ＢＰ（ＴＫ－７８）」によって，人骨も洪積世に由来するものであると考えられています。

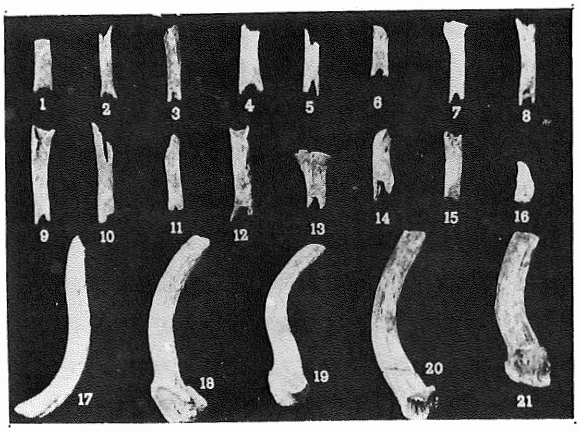
図　版　I

伊江島カタ原
洞穴遺跡

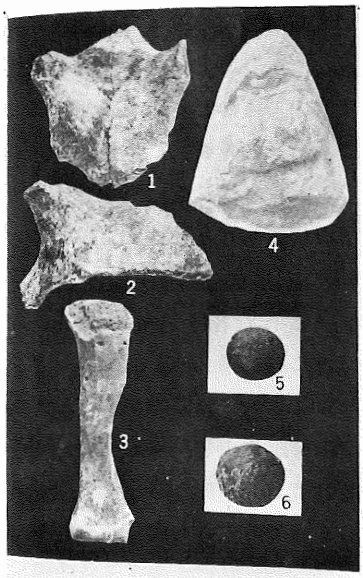
山下町第一洞穴
遺跡

山下町第一洞穴出土
鹿骨と石器

（高宮広衛，那覇市の考古資料
1968年　那覇市史編集室）



山下町第一洞穴出土鹿骨製品
（高宮広衛　那覇市の考古資料　1968年那覇市史編集室）



港川遺跡も洪積世人類の化石が発見された重要な遺跡です。

港川遺跡は，沖縄本島南部の東海岸側に位置する具志頭村字港川にあります。遺跡は海抜約２０ｍの海岸段丘を形成する牧港石灰岩のフイシャー（裂目）に形成され，雄樋川の南岸側にあって，海岸からの距離は凡そ２００ｍ位です。

遺跡付近の地質は，第三紀島尻層群を基盤に那覇石灰岩が堆積し，断層によって切られた地溝の凹所を埋めるように牧港石灰岩が堆積していると考えられています。現在，牧港石灰岩の平坦面は海抜２０～３０ｍです。この堆積面を海岸の方へ降りていくと，やがて一段低い海抜１５ｍほどの面に変わり，さらに海岸近くでは海抜５ｍの波食段丘面がみられます。

問題のフイシャーは石灰岩層が撓むような方向に何らかの力が働いた結果生じたものと考えられており，付近には規模は異るが，２，３のフイシャーが走っています。

人骨の出土したフイシャーは牧港石灰岩につくられた北東ー南西方向に走る，ほぼ垂直な，幅１ｍ近くの割れ目です。この裂目は確認される段階で，縦には現在の海水面あたりまで裂けており，横には数１０ｍの亀裂がみられます。

この亀裂に茶褐色の粘土質堆積物が埋っており，この中に多量の動物化石が含まれています。この堆積物は，上から落ちこんで埋積していったであろうと考えられており，全体として上部が新しく，下部にいく程古いと考えられております。土隆一氏の報告によると，堆積層は４層に区分されています。

１層にはマイマイの化石が多く，２層にはイノシシが多く，３層からはイノシシと人骨が採集され，４層からはイノシシ，さらにその下方からシカの歯と顎の骨が検出されています。

これらの堆積層のうち，１層と２層はよく乾燥しているが，３層以下はかなり湿っており，暗褐色でよくしまっています。

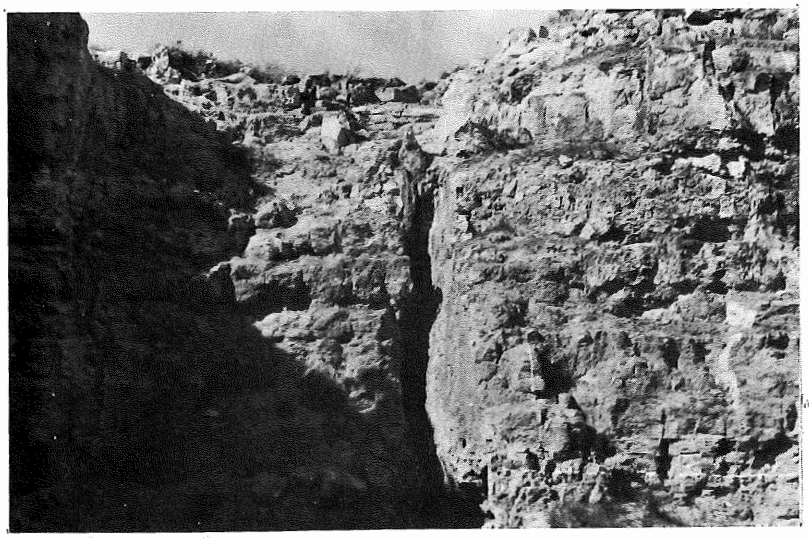
２層と３層の境界は海抜４.７～６ｍあたりで，現在の地下水面は海抜約１ｍです。さきに述べた海岸を縁どっている５ｍの波食段丘が縄文前期の高海面期の形成とすれば，３層と４層は地下水面下にあったのではなかろうかと推論されています。この推論によって，３層と４層は６０００年前から１０万年前までの堆積物だとされています。

渡辺直経氏はフイシャー内の下部（土隆一氏の層位区分では第３層）から人骨を検出し，この人骨の出土した粘土層に散在する木炭の ^{14}C 年代から，洪積世人類に間違いないと報告しています。因みに木炭片の ^{14}C 年代は１８２５０±６５０年前（資料番号ＴＫ－９９）という測定値が出されています。この ^{14}C 年代は，土隆一氏によると地質，地形学的にも矛盾しないと述べています。また，体質人類学的な面からも，この港川人は縄文人よりも三ケ日，浜北人などに類似していると報告されています。

鈴木尚氏は港川人に関する研究の中間報告として，要旨次のような講演をなされました。

「港川人骨は少なくとも５体はあります。計測できるものは４体で，男は１体で身長１５４㎝，女は３体で身長１４１.７㎝，１４６㎝，１４３.６㎝，平均して１４３.８㎝です。現代人から平均して約１.０㎝位の差があります。形質的には特有なものがあります。本土の縄文人とはタイプが違っています。一口でいうと，顔は丸顔でひたいは狭く，眉間が縄文人と比較にならないほど隆起が強く，歯が縄文人でもほとんどみられないような強い磨耗を示しています。手，足の骨が縄文人より

図　　版 II



港川遺跡
人骨の出土した裂目

港川遺跡出土の化石人骨（下顎骨）

も三ケ日，浜北人などに似ています。……」と興味深い特徴をあげています。早急に本報告が出されることを期待したいものです。

ところで，港川遺跡に関する記述が長くなりましたが，人骨の出土したフイシャーからは，文化的遺物は一片も検出されていません。ただし，イノシシなどの動物化石類は多量に検出されています。

以上のような調査所見に対し，沖縄の自然所収の「人類の渡来」を執筆したグループからは，港川遺跡については地形，地質学的に再検討の必要があるという問題提起もあります。結論の部分だけ抜粋すると「港川遺跡については，現在の崖面の位置は，採石によって大分後退したものとおもわれます。本来は，川に近いところに崖があり，割れ目も川岸に沿った崖面に開口していたものではなかろうか。もし，そうだとすれば，割れ目を満した物質は，上からの落ちこみばかりでなく，横からの流入堆積の可能性も考えられます。

また，旧石器時代の後期にどうやって人類やシカ，イノシシなどの動物が沖縄に渡来したかという疑問もあります。これまでの地質学的な研究によれば，第四紀の初めの琉球列島は，大陸と陸続きであって，その後の地殻変動や海水面の変動のなかで，現在のような島じまに分離したことが知られています。現在の沖縄の島じまから発見される化石動物群は，陸続きの時代に大陸から渡来したものです。その後の時代には，海上の道を渡るすべを知らなかった動物たちは，新しく渡来することはなかったのではなかろうか」と疑問視する向きもあります。

また，骨角製品を人工品とみなすかどうかについても「二カ所(山下町第一洞穴，港川遺跡）とも人骨は発見されているが，あきらかな人工遺物，つまり，石器や骨角器と判定できるものはまだ知られていない。獣骨はたくさんともなっている。」と述べ否定的な見解を出しています。

さらに，山下町第一洞穴，港川遺跡の発見を沖縄の旧石器文化の存在と直接結びつけることについても，まだ解明しなければならない大きな謎がのこされているとして慎重に扱うべきだとの意見もあります。

いろいろ論義されるなかで，骨角器製品については，調査者は勿論人工品として報告しているが，筆者も骨角器製品の一部については人工品であろうと考えています。

骨角器製品の用途については，直良信夫氏は「又状骨器の大部分は，おそらく利器の一種であったろうし，円形平板状の角器は装飾品の類であったかもしれない」と述べ，高宮広衛氏は「又状骨器の用途について，ＤＡＲＴ氏が述べた thong smoother(皮をなめらかにするための調整具？）だとかbark remover（樹皮などの剥離用具？）に使用されたとする説明に留意したいとし，さらに斧刃状の加工を施す鹿角器についても同氏が使用について説明したPick あるいはdigging－tool（掘り具？）に留意したい。」と述べている。また，当真嗣一氏は「又状骨製品については漁撈用のヤス」の用途を考えており，骨製品についての用途や機能論も展開されています。

沖縄で出土した骨製品のうち，斧刃状に整形したものに類似した資料は高宮広衛氏によれば，「北海道（畠山，１９６８）やインドネシアの新石器時代文化（水野，１９６１）の中にも含まれ類例は世界的に豊富のようである」と述べています。その中で，インドネシアの中石器時代とされる鹿角器に山下洞文化は最も近似するともいわれるが，文化の組成や年代において相違がみられ，両者の関係を見出すことは困難であると報告しています。そこで現段階では，骨製品の系譜や用途を一挙に解明することは困難のようですが，熱心な考古学徒によって近い将来明らかにされること

とおもわれます。

ところで，山下洞穴人（約3万年前）や港川人（約1万8千年前）の系譜についても，現在のところよくわかっていません。ただ，この人類は，沖縄で発生したとは考えられませんので，未だ沖縄が大陸と陸続きであった頃どこからか渡来したに違いありません。本土では山下洞穴人や港川人が生息していた頃，三ケ日人や浜北人などの活躍が知られています。これらの人類とは親縁関係にあると考えられています。しかし，沖縄の新石器文化をのこした人々との人種的系統については全く不明です。この洪積世人類の系譜や港川人以降の消息についても地質学や人類学の研究に期待しなければなりません。

最後に沖縄の先土器時代の課題について，若干ふれてみましょう。

1. 沖縄の先土器時代の文化の特徴は骨角器文化とも呼ばれる独特な内容をもっていますが，周辺地域と比較して，対応する文化はなく，その系譜について全く不明です。周辺地域との比較研究が不可決の課題です。
2. 先土器時代に位置づけられる遺跡がいくつかあげられますが，それら相互の編年と類例遺跡を多く発見することです。

現在，化石シカ産出地として県下では70カ所位知られています。これらの産出地には，文化遺物の包蔵が期待されますので組織的な調査が必要です。

ところが，シカ化石産出地は，すべて石灰岩地帯であり，最近のコーラル採取による乱開発によってその保存が危ぶまれています。

3. 骨角器文化に続く文化は土器を伴なう新石器文化ですが，時代的にも文化内容においても断絶がみられます。この空白な年代を埋める遺跡を発見することも今後の課題です。

2　貝塚時代（新石器時代）ー狩猟，漁撈，採集を基盤にした社会ー

沖縄洪積世人類の活躍は港川遺跡の調査によって今から約1万8千年前までは確認できますが，その後の様子は明らかではありません。絶滅したのか他へ移動したのでしょう。数千年もの長い歴史的空白が続いた後，再びこの島々に人々が住みつくようになったのは前代と比べ気候も温暖な沖積世の時代で今から約6000年前のことです。

この人類は道具としては石器を使い，土器をつくることもすでに知っていました。生活は主に海の幸，山の幸に依存し，各地に貝塚を遺しています。

この貝塚人の生活は新石器文化にぞくする特有なものですが，貝塚にのこされた当時の道具や自然遺物から生活の様子をうかがうことができます。

それで，この時代のことを通俗的に「沖縄貝塚時代」と呼んでおきましょう。

貝塚時代を，土器を中心とした先後関係によって従来の編年は，前期，中期，後期の三つの区分に分けていました。しかし，最近，読谷村渡具知東原遺跡で九州縄文前期に編年されている曽畑式土器や轟系土器が発見されました。さらに第2次調査では，曽畑，轟系土器の出土した層の下方から，一段と古い爪形文土器やヤブチ式土器が出土しました。現在，この爪形文土器やヤブチ式土器が，沖縄では最も古い土器と考えられています。

九州本土でも類似した爪形文土器が出土していますが，編年的には縄文早期頃に位置づけられていますので，九州縄文文化の展開にだいたい対応するような様相を示しています。しかし，九州縄文中期に対応する遺跡があるのかどうか，また，文化内容においても九州本土とは違った島嶼的な特有な内容をもつています。したがってその性格が判然とするまで，従来の編年を使用し，東原遺跡をそれに先行する早期（高宮他，1975）と位置づけて貝塚時代を概観しましょう。

1. 早期

（九州縄文前期頃，約６０００年前～４５００年前）

従来，沖縄の貝塚時代で一番古い遺跡は，伊波貝塚（石川市），熱田原貝塚（知念村），荻堂貝塚（北中城村），嘉手納貝塚（嘉手納町）で，時代的には九州縄文後期頃に相当するだろうと考えられていました。

ところが，１９７５年春から夏にかけて渡具知東原遺跡で採集された資料に曽畑，轟系土器が混在していることがわかり，沖縄考古学界に一大センセーションをひき起しました。

沖縄の土器の源流を曽畑式土器に求めようとする先学の研究を前進させ，現実的なものにした点で画期的なできごとでした。

沖縄の考古学研究史でさんぜんと輝くであろう，この東原遺跡の調査が第２次（第１次－１９７５年１２月２５日～５１年１月７日，第２次－１９７６年８月３日～８月２５日）にわたって行われました。以下，東原遺跡など，この時期に位置すると考えられる遺跡について紹介しましょう。

A，読谷村渡具知東原遺跡

読谷村渡具知東原遺跡は比謝川の川口北岸に形成され，標高２～３mの低いところに立地しています。

層序は第３層まで確認されています。

第１層は黒色土層（２０cm～４０cmの厚さ）で撹乱層，第２層は（黄褐色砂層（３０cm～５０cmの厚さ）で曽畑，轟系土器出土層，第３層は白砂混礫層で爪形文系土器出土層の順になっています。

第２層の曽畑，轟系土器は，器形が鉢形で，口縁部が直口するものと外反するものとの二種類に分けられます。底部は丸底です。

文様は竹ベラのような施文具で描かれた沈線文，鋸歯文，列点文及びそれらがいくつか組み合わされた幾何学文様です。文様帯は主として口縁部にみられ，胴部以下は無文か器面調整のための条痕がみられます。更に土器の内側にも文様が施されています。

色調は外器面が赤褐色，暗褐色を呈するものが多く，内器面は黄褐色を帯びるものがみられます。胎土には，沖縄に産する石英，長石が多量に混入していますが，西九州の曽畑式土器にみられる滑石紛末の混入は認められません。

石器は打製や磨製の石斧，磨り石，石皿，チャート製のスクレイパー，石核などを伴っているようです。

第３層は上部と下部に分けられ，上部からは幾分厚手の爪形文土器（爪形Ⅱ類）が出土し，下部からは幾分薄手（２～４mm）の爪形文土器（爪形Ⅰ類）が出土しています。この爪形Ⅰ類土器は，従来，国分直一，三島格の両氏が型式設定されたヤブチ式土器（与那城村薮地島ヤブ

チ洞穴出土の土器を標式とするもので，薄手で土器の内外面に指頭による浅い凹文が施された土器)の範ちゆうにぞくする土器です。そこで同種の土器に別名の型式名を設定することは混同をまねくとして，統一型式名を用いるべきであるという意見も出されています。検討されべきことでしょう。

ところで，第3層上部から出土した爪形Ⅱ類土器は，口縁部が直口あるいは僅かに外反する深鉢形で，底は丸底か尖底をなすものと推定されています。文様はヘラ描きによる爪形文です。この土器には，大型の打製石斧，磨り石状石器，チャート製のスクレイパー，石核などが伴っているようです。

第3層下部から出土した爪形Ⅰ類土器（従来のヤブチ式土器）は，口縁部が直口か微弱な外反を示す薄手の土器で，文様は指頭による浅い凹文が施されています。凹文は横位に器面全体を覆っています。底部近くの破片から底は丸底だろうと推定されています。

この土器に伴なう石器は不明ですが，撓形の大形の局部磨製石斧の刃部破片が1個確認されています。

この第3層出土の爪形文土器は九州縄文早期の鹿児島上場遺跡の爪形文土器によく類似していることから，早期頃に位置づけられるのではなかろうかと関心をもたれています。

しかし，地質関係で調査に加った古川博恭氏によると，第3層の砂礫層は当時の海岸線であり，生活層とは考えられない。土器は後背地あたりから川の水などによって流されてきた可能性があり，層位関係による遺物の年代判定については慎重を期すべきであるという意見も述べています。

また，爪形文土器に伴なう石器の状況も，しっかり把握されておらず，本土における組合わせの例とも相違していますので，これらの問題を解決するのには，かなりの時間とデータの検出が必要でしょう。

以上，成果と課題についてふれてきましたが，この遺跡は，とかくこの時期の研究をするのに標準遺跡であり，調査が進展するよう期待したいものです。

ところで，東原遺跡で曽畑，轟系土器の出土が報じられますと，あいついで各地で発見されました。これは日本で旧石器時代の遺跡が群馬県の岩宿で相沢忠洋氏によって発見されて以来，ぞくぞくと旧石器時代の遺跡が発見された事情とよく似ています。

B，野国第2遺跡

第2の曽畑，轟系土器出土の遺跡としては嘉手納町野国第2遺跡（高宮広衛氏は野国B地点と命名しています。今後，遺跡名を統一する必要がありましょう。）が知られています。

野国第2遺跡は，那覇市から沖縄本島中部嘉手納町に至る途中，米軍の太平洋地域における最大の基地といわれる嘉手納飛行場の道を隔てた海岸側にあります。地籍は嘉手納町兼久下原に属し，嘉手納飛行場から流れる排水が，両側の標高10m内外の隆起石灰岩から成る小丘陵に狭まれた低湿地帯を流れて東支部海に注いでいますが，その小川の周辺が曽畑，轟系土器の検出された遺跡です。

遺跡の標高は，高い所で3m内外ですが，検出されたレベルは，もっと低い2m以下の固い褐

色砂層です。

検出された遺物は土器片のみです。東原遺跡で報告されている第２層出土の曽畑，轟系土器とよく類似しています。

器厚は１１㎜内外が多く，うす手で６㎜，最も厚いもので１３㎜計測されます。胎土には，主として長石類が含まれ，石英，黒雲母，千枚岩の細片が混入しています。他には，雲母を主とする砂岩の異質岩片が部分的に濃集するものもみられます。

色調は褐色，黒褐色，暗褐色を呈するものが殆んどでありますが，一例だけは橙色を帯びた褐色を呈しています。焼成は全般的に良好であるが，中には粗悪でもろく，ひび割れの状態を示しているのもみられます。

文様は竹ヘラ工具による刺突文と沈線文，貝殻による圧痕文がみられ，また，貝殻縁による器面調整のための条痕が地文としてのこされているものもみられます。

１例だけ，種子島本城遺跡出土の曽畑式土器に器厚，手法ともよく類似したものがあります。

貝殻腹縁による圧痕文土器は，従来，赤連系土器と呼ばれていたもので，器形手法的に類似したものが奄美大島喜界町赤連，笠利町土浜遺跡，宝島小浜（小浜と大池は同一地点）遺跡などに登場しています。恩納村塩屋貝塚の採集品には類似した手法の土器がみられました。

この種の土器は，器厚や胎土，手法から九州縄文前期の轟系土器に類似したものであり，この土器の範疇か，もしくは縄文土器の系統とおもわれます。年代決定と型式同定が急務でしょう。

高宮広衛氏が野国第２遺跡から採集された資料は，口唇部に太い凹文がみられ，現破片の器体部の右側には縦位の爪形文が，左側にはやはり縦位の擬縄文的文様が２条施されています。施文の位置，器厚，胎土，調整手法のうえから古式的な様相を帯びていると報告しています。おそらく上述の土器に関連するものであろう。

C，喜屋武同村貝塚

本遺跡は曽畑，轟系土器や面縄前庭式土器（鹿児島在の河口貞徳氏が型式設定した土器で，徳之島面縄第Ⅳ貝塚前庭部から単独に出土した土器につけられた名称。器形は口縁部が外反し，顎部でしまり，胴部で張り出す丸底か，丸底をたたいたような形のかめ形土器です。口縁部と顎部，胴部の堺にそれぞれ１条の細い凸帯をめぐらし，更に交又するように縦状の凸帯がみられます。文様は凸帯上にヘラによる刻目か，二又の半截竹管状の工具による連続的刺突文が施され，上下の凸帯間に数条の鋸歯状文が配され，胴部の凸帯下にも同様の沈線文がみられます。器壁は一般に薄く，色調は黒褐色を呈しています。河口氏は宇宿下層式から上層式に移行する過渡期のものと考察しています。）ならびに後期無文土器の出土する余り類例のない重複遺跡でしたが，貯水施設工事のため破壊されてしまいました。

文化財関係者が訪れた時には，殆んど破壊された跡でしたが，かろうじて遺物を採集し，遺跡の性格を知ることができました。

当時の調査メモから遺跡の概要を説明しましょう。

本遺跡は糸満市字喜屋武の海岸近くにある部落共同井（喜屋武井（ガー））から湧水の流れる低地帯にあります。湧水のある泉あたりが海抜７～８ｍの地点で，泉を中心に遺跡は南北に広がっています。

遺跡付近には，青灰色のシルト質粘土からなる島尻層群と同層群を不整合におおう琉球石灰岩がみられます。遺跡は，海側から浸食されてできた海蝕台上に位置し，この海蝕台をビーチ，ロック（かっては海蝕台を不整合におおう海砂浜）がおおています。ビーチ，ロックの厚さは2m以上に及んでいました。さらにビーチ，ロックの上を褐色混土砂層が堆積しています。
遺跡の背後には垂直な崖や傾斜面もみられますが，現海水面よりも高い時の海水面時に形成されたとおもわれるノッチも確認されました。

ところで，現世に入り，海進がもっとも進行した時期は縄文前期頃と考えられており，このビーチ，ロックはその頃の海進によってもたらされた海浜砂と考えられます。
後述する曽畑，轟系土器が，このビーチ，ロックの層から検出されたこととも一致して興味深いものがあります。
ビーチ，ロック中の曽畑，轟系土器は，ビーチ，ロックに包まれるように入り込んでおり，すべて小破片でもろく，固いビーチ，ロックを割って取り出すまでには，形がくずれてしまうような状態でした。また，形のあるものでも磨耗されて角は丸くなっており，文様も損耗されて不鮮明でした。また，生活層と推定される焼けた砂（厳密にいえば焼けたビーチ，ロック），木炭，灰などが3～5cmの厚みで広がりをもち，ビーチ，ロックの頂面が2.5m内外の表面または層の中に確認されました。この生活層よりもレベルの下った海抜110～60cmの層準からは化石人骨（頭骨），曽畑，轟系土器，凹石，獣魚骨片，木炭などが検出されました。
これらの生活遺物は波により多少おし流されてビーチ，ロック中（当時の汀線か海浜）に混入したとも考えられますが，そんなに移動したとは考えられません。
すなわち，喜屋武貝塚人（曽畑，轟系文化人）の場合，生活面が海抜2.5m内外ではなかろうかと推定されました。

本遺跡から出土した曽畑，轟系土器は，先述したようにすべて細破片でもろく，現段階で器形や文様の展開を考察するのには困難ですが，若干の特徴について述べてみましょう。
曽畑，轟系土器と確認できる資料は，13片検出されましたが，有文は3片にみられ，そのうち1片が口縁部片です。
口唇の断面がやや丸味を帯びて直口する器形で，色調は外器面がゆう褐色，内器面が黄色味を帯びたゆう褐色を呈しています。文様の要素は工具を器面に深く刺し込んで施文した刺突文と押点文からなり，刺突文は横位に無軸の羽状文をおもわせるものであるが，小破片のため展開は明らかではありません。押点文は，斜めに縦走しているようです。器面の内側にも，単列の米粒大の刺突文様がみられます。この曽畑，轟系土器の検出された層準（海抜110～60cm）からは凹石，獣魚骨，貝類の他，化石人骨（頭骨）も検出されました。
これらのものが，時代的に文化内容においても共存関係にあるのかどうかはもっと検討しなければなりません。
化石人骨については，専門家の調査報告によって判明されるだろうとおもいます。

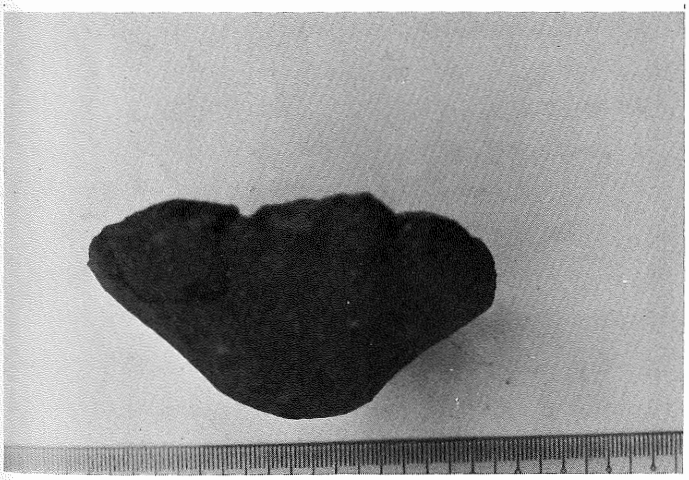
d　その他の遺跡

その他，従来の前期（伊波，熱田原）に先行する遺跡として知られているものには，渡嘉敷島船越原第1遺跡，奄美大島宇宿高又遺跡，宇堅第2貝塚，伊是名村具志川島，玉城村玉泉洞

図　版　Ⅲ

東原遺跡の発掘調査

東原遺跡出土の
曽畑，轟系土器



東原遺跡出土の
曽畑，轟系土器底部

貝塚，コザ市室川貝塚の最下層，恩納村仲泊などが知られています。室川貝塚以外は表面採集によって得られた所見であるので，詳細は不明です。
渡嘉敷島船越原第1遺跡，宇宿高又遺跡は，読谷東原遺跡の第2層～第3層から検出された資料が出土しています。伊是名具志川島からは轟系かとおもわれる土器が，コザ市室川貝塚からは従来の赤連系といわれる土器が検出されています。
コザ市室川貝塚については，沖国大考古学ゼミ教室から報告書が出されることとおもいますので，その性格が明らかにされることでしょう。

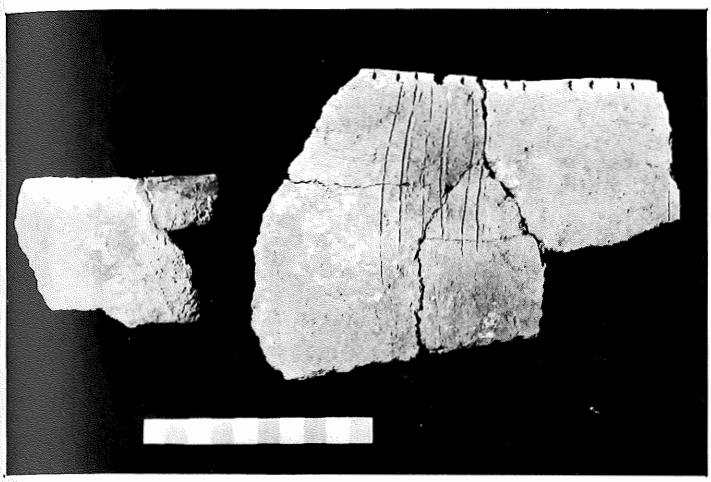
恩納村仲泊からは，高宮広衛，知念勇氏が設定した爪形1類（従来のヤブチ式）土器が，米人ワットスン氏によって採集されています。当時，その資料を受入れた大城精徳氏の話によると，採集場所は仲泊貝塚付近であるとのことです。
この土器は4㎜内外の薄手の土器で，器面内外に石灰質が付着し，そのためか堅緻です。その付着の状況から石灰岩に由来する海浜遺跡か洞穴遺跡から採集されたことが推定されます。
口縁部に近い器体部であるが，器壁調整のための手法が結果的には浅い凹文となってのこされています。外器面には指頭による押引き的な浅い凹文が一条の線となってのこされ，内器面には横位に指頭による押圧文（凹文）が列点文としてのこされています。この種の土器は従来，与那城村薮地島の洞穴遺跡や奄美大島ヤーヤ洞穴からの出土が知られていましたが，読谷村東原遺跡からは最下層（第3層下部）から出土して，現在のところ，沖縄での最古式土器として注目されているものです。

玉城村前川在の玉泉洞近くの洞穴からは，九州縄文系統とおもわれる，従来，沖縄では知られてない興味深い土器が採集されています。発見の端緒になったのは，１９７０年頃，愛媛大学洞窟探検隊による玉泉洞周辺の洞穴調査によって明らかにされたものです。
今年に入って，玉泉洞営業課長山内平三郎氏のご好意により展示中の資料を見る機会を得，さらに出土した洞穴を山内氏の案内で，洞窟研究家の新垣義夫氏（普天間宮禰宜），当館の大城逸朗氏等と調査しました。僅かの時間の調査であったが，その時の所見を記し，後日調査する機会を得たいとおもいます。遺跡の名称は，すでに玉泉洞関係者によって「玉泉洞貝塚」と命名されておりますので，それを使用したいとおもいます。

玉泉洞貝塚は，具志頭村と玉城村の境界となっている雄樋川の北岸にあって，川口に架っている堀川橋から直線で１２００ｍ位の半洞穴に形成されています。雄樋川の川口から上流約１０００ｍあたりまでは氾濫原となり，川幅も広く一帯は低湿地帯になっています。玉泉洞貝塚は川に面し，遺跡のあるあたりで川幅はぐっと狭くなっていますが，低湿地帯が続き，カシの木などの喬木類が繁茂しています。このカシの木類が生えている低地と遺跡との比高は２～３ｍ位で，遺跡の標高は，海抜５ｍ内外です。

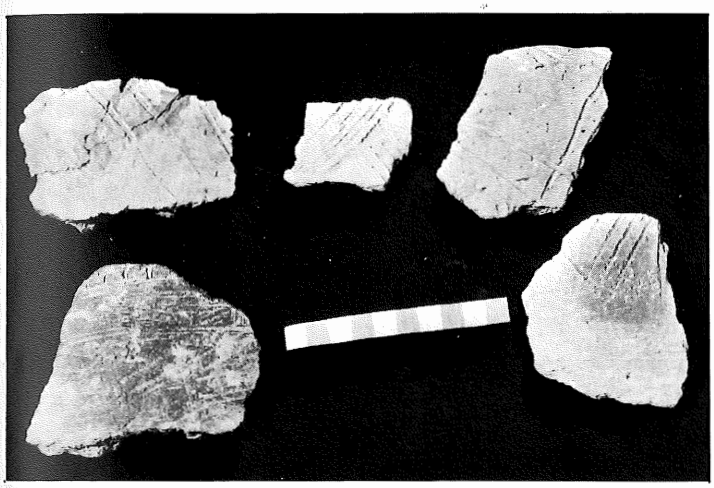
遺跡は石灰岩の半洞穴で，洞穴の開口部が川に開いています。間口約７ｍ，洞の天井１ｍ内外，奥行き深いところで3.5ｍ内外で，洞内には灰を含んだ堆積層がのこされています。
以前に愛媛大学の仲田秀雄氏が洞内の一隅に小ピットを設け，３０～４０㎝位掘り下げ遺物を検出しています。ここから発掘された資料の一部は，整理のため愛媛に持ち帰られたと聞いていますが，他は玉泉洞の展示館に展示されています。

図　版　IV



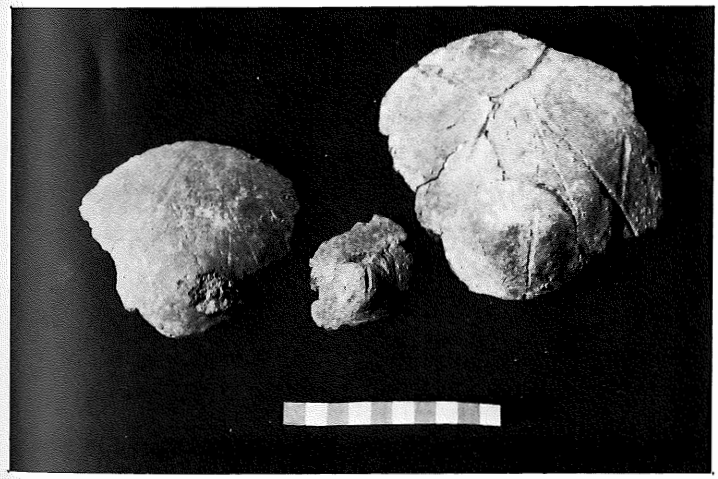
玉泉洞貝塚出土の
縄文系土器

右　刺突文十沈線文



玉泉洞貝塚出土の
縄文系土器

沈線文土器



玉泉洞貝塚出土の
縄文系土器

尖　底
せん　てい

展示された土器について，若干紹介しましょう。展示品は総数１９点で，そのうち１点だけは薄手の後期無文土器です。今，問題にしている土器は，のこりの１８点についてですが，口縁部にぞくするもの２点，顎部にぞくするもの３点，器体部にぞくするもの9点，底部（尖底）が４点です。

口縁部は有文破片で2片とも器壁の厚い赤褐色を帯びた焼成良好な土器で，胎土に石英粒が混入した土器です。大破した土器片の文様は，口唇部に沿うように押引き手法による刺突文が配され，その直下を数条（６条）を単位とする沈線文が縦位に施されています。口縁の断面は舌状をなし，直口的な器形です。他の小片は，口唇にヘラ状工具による短直線が斜めに深く刻まれ，その直下を交又する沈線文が施されています。内面にも，単列刺突文がみられます。顎部には，地文としての条痕が縦位にもしくは斜行に，または横位にみられます。底部は４点とも尖底で，上方に大きく開いています。

以上のような僅かな資料からは何ともいい難いが，器壁が厚いこと，調整手法が貝殻条痕的であること，色調が赤褐色で胎土に石英粒が混入すること，文様が口縁部位にみられ，また内面にもみられることは，従来の沖縄の土器にはみられない特徴です。立地的な面も検討して，九州縄文前期的な土器か，ないしは縄文系統の土器とおもわれます。いずれにしても注目すべき遺跡とおもわれますので，本格的な調査が期待されます。

ところで，雄樋川一帯には，化石人骨の出土した港川遺跡，上記の玉泉洞貝塚，武芸洞遺跡，マジムン洞遺跡，ウァーグアーガマ洞穴遺跡（玉泉洞内からの水が雄樋川に流れてくる洞窟の右側崖下一帯，１９６０年頃筆者が確認），前川ガラガラー出口の貝塚，ガラビ豪洞穴遺跡，新里豪洞穴遺跡など，時代的にも幅のある多くの洞穴遺跡が分布しています。これらの遺跡を群として保存し，相互の有機的な関連を把握するための総合調査が必要です。

以上，東原遺跡を中心として従来知られている遺跡に先行する，新しい遺跡を紹介しましたが，この項目のまとめとして曽畑，轟系土器の出土する遺跡を中心に収束してみたいとおもいます。

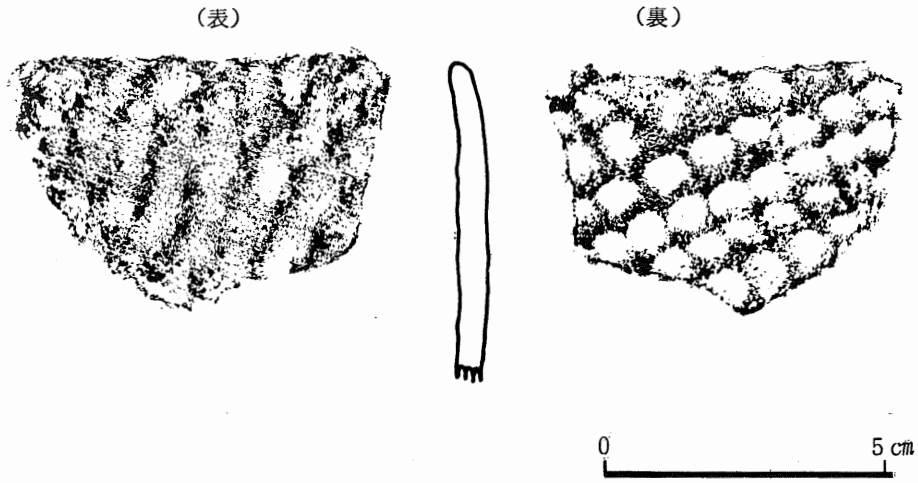
(1) 遺跡の立地として標高２～３mの川口に面する低砂丘地か（読谷東原），海岸に面する低砂丘地（野国第２，喜屋武同村貝塚）にあります。曽畑，轟系土器に先行する爪形Ⅰ類土器（ヤブチ式）は単一文化層としてヤブチ洞穴前庭部から発掘されていますし，玉泉洞貝塚のように古い様相をもつ縄文系統の遺跡も洞穴遺跡ですので洞穴遺跡は今後注目しなければならないとおもいます。

(2) 従来の伊波，荻堂に先行する土器として，曽畑，轟系土器→爪形Ⅱ類土器→爪形Ⅰ類土器（ヤブチ式土器）が確認されています（東原遺跡）。轟式土器は型式的には，轟A式，B式，C式，D式に分類されていますが，沖縄から検出される轟系土器は，型式的にはどれに同定されるものであるのか具体的にはわかっていません。轟A式，B式に手法的によく類似しているとか，D式も含めて，ごっちゃ混ぜに入ってきているとか，轟系の要素を帯びた土器であるとかの意見があるようです。轟A式，B式に同定されるのであれば，九州縄文早期あたりになるとおもいます。ところで，曽畑式土器の年代の上限については，いろいろの意見が出されていますが，曽畑式土器と称される細線刻文土器は前期前葉とすることが認められています。その終末は熊本県玉名郡尾田貝塚出土の^{14}C 年代からＢＣ，３０００年前後だろうとされています。

(3) 爪形Ⅰ類（ヤブチ式土器）は，ヤブチ洞穴遺跡では，間層の無遺物層を挟んで下層に単一文

化層として登場しています。しかし，奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡では，沈線文土器，条痕文土器，刺突沈線爪形文土器などと混在しているようです。この出土状況はヤブチ式土器との共伴関係や持続年代を考えるうえに有力なデータです。

図　版 V　ヤブチ式土器（仲泊出土）
表裏ともに指頭による浅い凹文がみられる。



(4)　東原遺跡第２層出土の曽畑，轟系以降の発展については，現段階では不明です。しかし，沖縄市室川貝塚発掘調査速報によると，ピットＭ－６及びＳ－５の下のレベルからは，従来，赤連系といわれる貝殻文とヘラによる短直線文土器などが，伊波式土器と混在して検出されています。先述したように赤連系土器は九州縄文前期的な様相を帯びた土器ですが，室川遺跡の今後の調査によって，赤連系土器と伊波系土器との層序関係や土器の変容などがつかめるのではなかろうかと期待されます。

現段階では，古い様相の赤連系土器と従来の伊波系土器との間には型式的にストレートに移行しないという見方が一般です。

今後，このギャップを埋める作業が必要です。

(5)　高宮広衛氏は，上記の（４）の問題や編年に関する問題にふれながら次のように述べています。「……今回の読谷村渡具知における縄文前期土器の発見によって沖縄諸島の新石器時代文化はさらに古く遡ることになるかも知れないが，これをもって直ちに九州本土の推移に合致する編年表を作成する必要は今のところないと考える。おそらく縄文前期文化が沖縄諸島に到着するや間もなく（例えば，縄文中期の頃から）沖縄諸島の新石器文化は独自の方向へと歩みはじめ，時代が進むにつれて次第にその傾向を強めたものと推察される。」という所見が現段階の情況であろう。

(6)　曽畑，轟系土器やそれに先行する爪形Ⅱ類，爪形Ⅰ類土器が発見されることによって，従来知られている年代を一挙に２０００年以上も遡らせたことになり，発見上の意義はきわめて大き

い。また，曽畑式土器は，朝鮮半島の櫛目文土器（釜山市影島区東三洞貝塚）に源流をもち，西九州地方（佐賀，長崎）に濃密に分布し，熊本，鹿児島，種子，屋久島を経て奄美，沖縄に分布していることがわかり，大きな文化圏を形成していることがわかりました。

(7) 東原遺跡などに登場している曽畑，轟系土器，それに先行する爪形Ⅱ類，Ⅰ類土器文化をのこした集団は，海に依存した漁撈民で，貝塚を形成していない点からみて一時的な，キャンプ的な生活を営んでいたのではなかろうかと想定されます。

追記

「原始，古代の沖縄」に関する紹介は，なお続きますが，今回は紙数の制限等で本稿を閉じます。（77年3月7日）

引用・参考論文

1. 直良信夫「琉球伊江島の半洞窟遺跡」日本旧石器時代の研究所収，寧楽書房
2. 高宮広衛「山下町第1洞穴」那覇市の考古資料所収，那覇市史編集室，1968年
3. 高宮広衛「沖縄の旧石器時代文化」歴史教育所収
4. 渡辺直経「沖縄における洪積世人類化石の新発見」人類科学第23集抜刷
5. 渡辺直経「沖縄における洪積世人類遺跡の調査」南島考古第3号，沖縄考古学会，1973年
6. 土隆一「地質学的に見た沖縄の洞穴とその堆積物」南島考古第3号，沖縄考古学会，1973年
7. 沖縄第四紀調査団，沖縄地学会編「人類の渡来」沖縄の自然所収，平凡社
8. 安里嗣淳「伊江島ゴヘズ洞穴発見の鹿骨角製品」琉大史学所収，琉球大学史学会，1976年2月
9. 当真嗣一「沖縄の旧石器時代遺跡とその発見」沖縄思潮第7号所収，沖縄思潮編集委員会 1975年6月
10. 鈴木尚「沖縄における洪積世人類の発見」。
    高宮広衛，金武正紀，鈴木正男「那覇山下町洞穴発掘経過報告」
    土隆一「沖縄本島南部の地質と山下町洞窟の形成」
    高宮広衛，玉城盛勝，金武正紀「山下町洞穴出土の人工遺物」
    人類学雑誌第83巻第2号所収 日本人類学会，昭和50年6月
11. 「日本の旧石器文化」雄山閣 昭和51年2月15日
12. 橘行一，阪口和則「五島列島の縄文土器を含むビーチロックの年代」The Quater nary Research Vol 10 No 2
13. 野原朝秀，長谷川善和「沖縄本島産象化石について」
    長谷川善和，大塚裕之，野原朝秀「宮古島の古脊椎動物について（琉球諸島の古脊椎動物相－その1）」国立科学博物館専報第6号所収，国立科学博物館 1973年12月
14. 永井昌文，三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」考古学雑誌第50巻第2号所収 日本考古学会，昭和39年11月

15. 国分直一，三島格「ヤブチ式土器，琉球と奄美大島における文化交流の一証跡」
水産大学校研究報告人文科学編第１０号所収　昭和４０年３月
16. 高宮広衛，知念勇，上地正勝「沖縄県読谷村渡具知東原発見の土器」考古学ジャーナル№115
（1975　10月号）所収　ニューサイエンス社
17. 知念勇「渡具知東原遺跡発掘調査概要」読谷村立歴史民俗資料館　館報№1所収 1976年
18. 高宮広衛「資料紹介，嘉手納村野国B地点発見の土器」　文学部紀要社会学科編所収，沖縄国際大学文学部，1976年3月
19. 新田重清「糸満市喜屋武同村貝塚出土の曽畑，轟系土器について」。「野国第2遺跡発見の曽畑，轟系土器について」博物館紀要第2号所収，沖縄県立博物館，1976年
20. 盛園尚孝，国分直一，重久十郎「鹿児島県西之表市本城，田之脇遺跡調査概報」
西之表市教育委員会，市社会教育課 1973年
21. 江坂輝彌「朝鮮半島櫛目文土器文化と西九州地方縄文文化，前期の曽畑式土器文化との関連性について」考古学ジャーナル№128（1976 10月号）所収，ニュー，サイエンス社
22. 松本雅明，富樫卯三郎「轟式土器の編年ー熊本県宇土市轟貝塚調査報告ー」考古学雑誌４７巻３号所収日本考古学会，昭和３６年１２月
23. 佐賀県立博物館編「九州の原始文様ー縄文土器にその原点を探るー」昭和５２年1月
24. 高宮広衛，比嘉賀盛「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」沖国大考古創刊号所収，沖縄国際大学文学部考古学研究室　1976年

第１図　沖縄の遺跡分布図

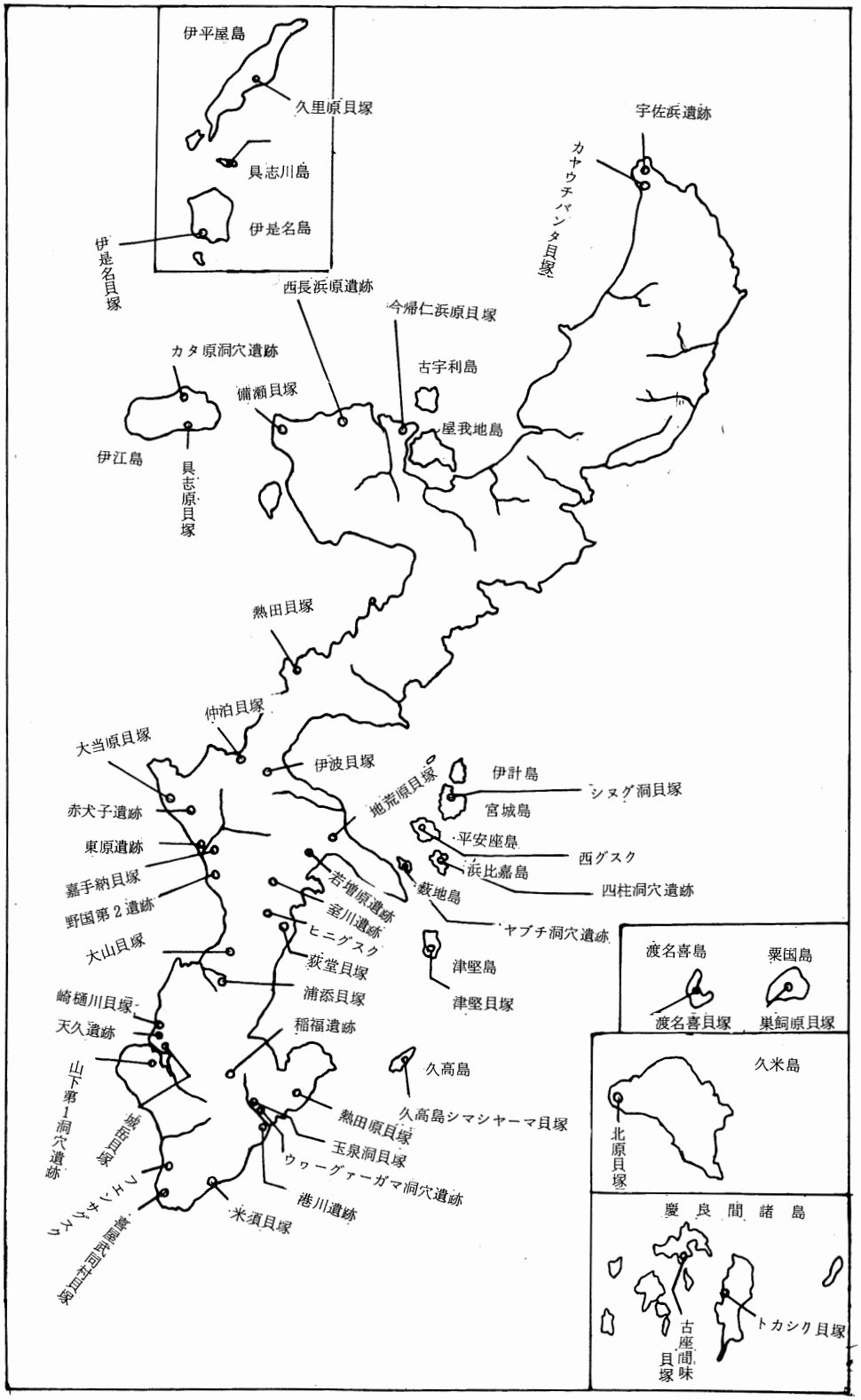
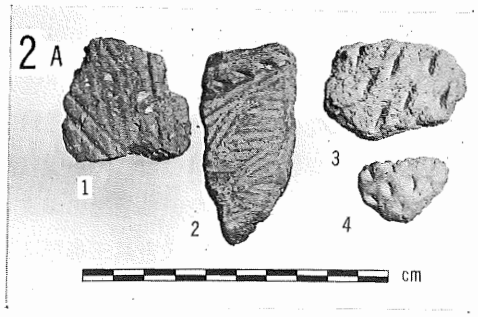
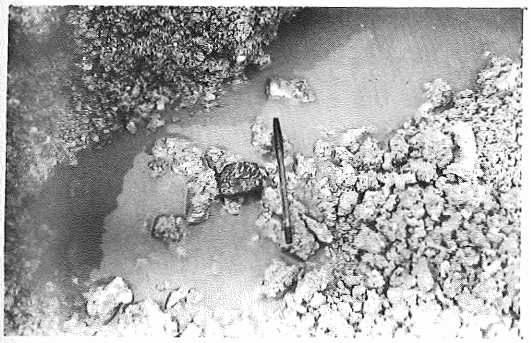


図　版　VI

野国第２遺跡
凹地になっている小川の土手から土器採集

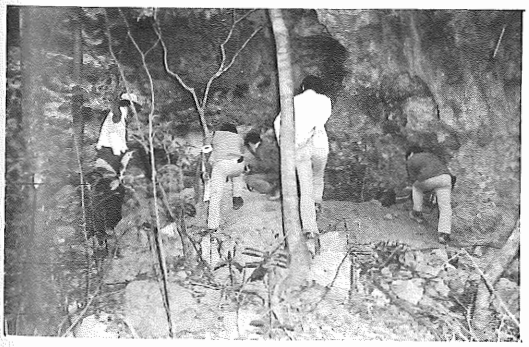


野国第２遺跡出土の曽畑，轟系土器

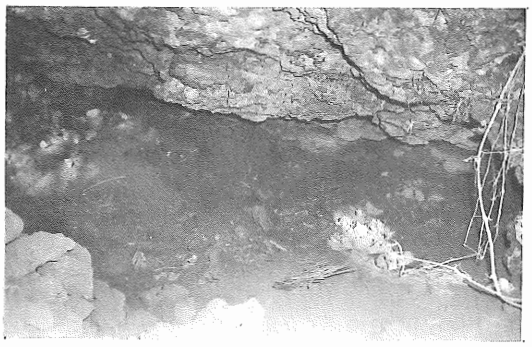


糸満市喜屋武同村貝塚
ビーチロックから曽畑式土器検出

沖縄市室川遺跡
九州縄文系の古い土器と伊波系土器が検出



玉泉洞貝塚



玉泉洞貝塚洞穴内部